

エッセイ

変わりゆくヴィクトリア女王の「イメージ」

新井 潤美

ヴィクトリア女王というと、まずはあの有名な言葉 ‘We are not amused’ を思い出す人も多いだろう。ヴィクトリア女王がいつ、なぜ、この言葉を口にしたのかについては様々な説がある。その一つによると、宮廷に出入りしていたキャロライン・ホランドが、1919年に出版した回顧録 *The Notebooks of a Spinster Lady* に書いていたことである(268-69)。彼女の記述によると、ウィンザー城での晩餐会で、侍従の一人が「不適切」な逸話を語ったときに、女王が発した言葉だったということだ。

また、W・S・ギルバートとアーサー・サリヴァンの「サヴォイ・オペラ」の中の初期の作品『軍艦ピナフォー』(1878年初演)の上演の際に発した言葉だという説もあるらしい。ただしこの説であれば、ヴィクトリア女王が「サヴォイ・オペラ」のファンだったことを考えると、いささか奇妙に感じられる。ヴィクトリア女王は演劇や文学の趣味が「大衆的」であり、例えば当時人気のあったアメリカの猛獣使い、アイザック・ヴァン・アンバーグのショーを非常に気に入り、それを6回も見に行ったことが知れ渡って、観客が殺到したというエピソードも知られている。彼女は小説ならばチャールズ・ディケンズの作品(「そんな軽薄な本を読むな」と母親に叱られたことをヴィクトリアは1839年1月1日の日記に書いている)、絵画ならばウィリアム・プリス、歌劇はロッシーニなどの明るくてキャッチーな曲が満載されている作品、そしてサヴォイ・オペラを好んだのである。サヴォイ・オペラに至っては、それを上演していたドイリー・カート歌劇団をウィンザー城に招いて、特別公演をさせたくらいである。そんなヴィクトリア女王が『軍艦ピナフォー』に不快感を示したという逸話は興味深い。この作

品では、船乗りにもかかわらず礼儀正しい、丁寧な言葉づかいを重んじる（船乗りの言葉は乱暴であることで有名だった）、コーコラン船長という人物が登場するが、彼はストレスに負けて‘Damn me’という言葉を出してしまい、居合わせた海軍司令長官とその親戚のご婦人方を動揺させるというくだりがある。1879年に『軍艦ピナフォー』の「子供上演バージョン」をギルバートが書いた時に、船長の‘Damn me’がそのまま使われていたために、観客の一人だったルイス・キャロルが非常に憤慨したことはサヴォイ・オペラ・ファンにはよく知られている話だが、これがヴィクトリア女王の‘We are not amused’と混同されたのかもしれない。

2014年にヴィクトリア女王の伝記を出版したA・N・ウィルソンによると、実はこの言葉はヴィクトリアの四女ルイズが、1895年からヴィクトリアの秘書を務めたサー・アーサー・ビッグと恋愛関係にあった時に発せられたものだという。サー・アーサーは酒を飲むと猥褻なジョークを言うのが好きで、ある日の晩餐会で酔っ払って他の客をしらけさせていたので、女王はサー・アーサーに向かって、あの有名な言葉を発したというのである。しかも、ウィルソンによるとこのときの‘we’はいわゆる‘royal we’ではなく、文字通り「その場にいる人全員」という意味の‘we’だという。

ヴィクトリア女王がどこでこの発言をしたのか、そもそもこのような発言を実際にしたのかということは結局は不明だが、この言葉はいつのまにかヴィクトリア女王の口癖としてすっかり有名になり、気難しく、ユーモアを解さない堅物としての女王のイメージの形成に貢献したのである。

いかめしくて気難しい女王のイメージはさらに、写真の中の彼女が常に無表情であることによって強められたと言えるだろう。当時の写真では笑顔を見せないことが普通であり、撮影にも時間がかかるので、どうしても凍りついたような表情になってしまう。さらに、女王が少女時代を過ぎるとかなり恰幅がよくなり（彼女は食べることが好きで、お菓子にも目がなく、何度も節食しようとしたが、失敗に終わった）、その堂々とした体格が、見る者に畏怖を感じさせたということもあるだろう。

20世紀においてはヴィクトリア朝に対する文化面での反動が起こっており、‘Victorian’という形容詞は「古くささ、趣味の悪さ、偽善、上品ぶった言動」といった、ネガティブなコノテーションを持つようになっていた

が、それはもちろんヴィクトリア女王自身のイメージをも、ネガティブなものにしていた。‘We are not amused’はコメディアンジョークやテレビのコマーシャルに頻出し、ナポレオンの‘Not tonight, Josephine’と並ぶ、「よく引用される有名な歴史的人物の台詞」となっていった（信憑性が疑われるという意味でもこの二つの台詞には共通点がある）。

数々の歴史書や伝記には、このような「一般的な」イメージとは違う、ヴィクトリア女王の姿が書かれてきたが、やはりイメージづくりに最も貢献するのは、映画とテレビドラマだろう。例えば1997年に放映されたジョン・マッデン監督、ジュディ・デンチ主演の映画『Queen Victoria 至上の恋』（原題*Mrs Brown*）はヴィクトリア女王と、馬丁のジョン・ブラウンとの関係を描いた作品である。邦題の「恋」という表現が物語っているように、これは、アルバート皇太子の死後ずっと喪に服して二度と恋をしなかったというヴィクトリアの一般に広まっているイメージを覆すものとして話題になった。

1864年にヴィクトリアは主治医のウィリアム・ジェンナーの薦めで、それまで中断していた乗馬を健康のために再開することにした。その際、馴染みのある馬丁をということで、バルモラルで馬丁を務めていたジョン・ブラウンが呼び寄せられた。ジョン・ブラウンは女王に対しても率直にものをいう、遠慮の無い、ウイスキー好きの、当時39歳のスコットランド人で、アルバートのお気に入りでもあった。ヴィクトリアはブラウンを信頼し、自分専用の使用人にして、どこにでも連れ歩くようになったのである。この二人の関係は好奇の目で見られ、噂の種となり、ヴィクトリア女王には「ブラウン夫人」というあだ名さえつけられた。1868年に出版された、ヴィクトリア女王の『スコットランドの生活を記した日記の抜粋、1848年から1861年まで』にはすでにブラウンへの言及が目立つ上に、最初にブラウンの名前が現れる箇所には、ヴィクトリアによる長い注がつけられている。その中でヴィクトリアはブラウンについて、

彼はこうえなく私の面倒を見てくれて、世話をしてくれて、信頼できる人だ。私はここ数年の間ひどく体力が衰えていたので、このような人は私にとってたいへん貴重であり、身の回りの世話をしてくれることはたいへ

ん有難い。彼は当然だがアッパー・サーヴァントに昇格し、今は私専用の使用人となっている（一八六五年十二月）。スコットランド人に特有の自立心とプライドを持っていて、とても率直で、素直で、親切で、私心のない人だ。何事も嫌がらずにやってくれるし、希に見るほど適切な判断力を持ち合わせている。

と誉め上げている。

この日記では、他の使用人についてもヴィクトリアは注でその経歴や地位を説明しているのだが、これだけ丁寧な贅辞を含んだ注を書いているのは、たしかにブラウンだけかもしれない。また、この日記が「筆者の人生を明るく、幸せなものにしてくれた愛しい方」、つまりアルバート王子に捧げられているのに対して、1884年に出版された『日記からのさらなる抜粋、あるいはスコットランドでの生活、1862年から1882年まで』では献辞が「私に忠実なスコットランドの人びとへ。特に献身的に尽くしてくれた私の従者、そして誠実な友人ジョン・ブラウンの思い出に」となっていることも新たに彼らの関係に関する憶測をよんだ（ブラウン自身は1883年に亡くなった）。

当時は国民の間で話題になり、『パンチ』にも何度か風刺画が掲載されたジョン・ブラウンとの関係は、20世紀以降はヴィクトリアの「お堅い」イメージの普及と共に忘れられていた。実際、ヴィクトリアの長男エドワード7世は、母親がブラウンに宛てた手紙を全部買い上げて、それが公衆の目に触れるのを阻止しようとしたとウィルソンは指摘している。映画『Queen Victoria 至上の恋』はヴィクトリアとブラウンの関係が実際にどのようなものであったかを解明する試みは行っていないが、それまで忘れられていたヴィクトリアの一つの顔を明らかにしたことで話題になったのである。

同じ階級の人間よりも、階級がまったく違いながらも自分の身の回りの世話をする、もっとも親密な立場にいる使用人に、友人や家族にさえ見せない顔を見せるというのは、アッパー・クラスによく見られることだった。知的なアルバートから様々なことを教えられ、年季を重ねるにつれて、多くの知識を得て、洗練されていっても、本質的には素朴な趣味を持ち続け

たヴィクトリアの場合は、高い知性を持つパートナーがいないことに物足りなさを感じることもなく、逆にあまりにも立場が違う使用人のほうが、かえって心から信頼できる存在となり得たのであろう。

ジョン・ブラウンの死後、ヴィクトリアは1877年にイギリスにやってきた、24歳のアブドゥル・カリムという名のインド人の使用人に目をかけて、再び噂になったが、彼らの関係もまた、映画の題材となった。2017年に公開された、ステイーヴン・フリアーズ監督の映画『ヴィクトリア女王 最期の秘密』（原題 *Victoria & Abdul*）では、ジュディ・デンチが再びヴィクトリア女王を演じている。映画の原作を書いたのはインドのジャーナリストで歴史作家のシュラバーニ・パスである。ジョン・ブラウンの場合と同様に、女王がカリムに宛てた手紙は女王の子供たちによって処分されていた。しかしパスはアブドゥル・カリムの子孫が保存していた日記を発見し、それをもとに、女王とインド人の使用人との交流を描いたのである。

ヴィクトリア女王が愛情溢れる人間であるという表象は、日本でも放映されたイギリスのテレビ・ドラマ・シリーズ『女王ヴィクトリア 愛に生きる』（原題 *Victoria*）の特徴でもある。イギリスの民間放送局ITV (Independent Television) によって2016年 (Series One)、2017年 (Series Two)、2019年 (Series Three) と、3年にわたって放映されたこのドラマ・シリーズは、またもや邦題が明瞭に示すように、ヴィクトリアが即位してからいかに様々な男性に愛情を抱いてきたかを描いている。例えば、ウィリアム四世が亡くなった朝の9時にヴィクトリアのもとにかけつけて今後のことを指導したメルバン卿は、その後毎日のようにヴィクトリアのもとを訪れ、一緒に夕食をとり、正式な晩餐会では必ず隣に座っていた。メルバン卿はヴィクトリアに多大な影響を与え、公私ともに彼女の支えとなっていたが、二人のこの親密な関係は周りの人間、特にウィッグ党のメルバン卿の政敵であるトーリー黨員たちの輦轡をかき、ヴィクトリアは「メルバン夫人」と揶揄された。このドラマのコンサルタントでもあったA・N・ウィルソンはメルバン卿について「摂政時代の放蕩者」と形容し、「多くの愛人がいたが、精神的に満たされることはなかった。そんな彼の人生にヴィクトリアが入ってきたのである。二人の関係は教師と弟子のようなものだった。互いに相手を愛していたが、それは肉体的に表現できる類いの愛ではなかった」と

『サンデイ・タイムズ』のコラムに書いている(2016年8月28日)。そして *Victoria* では、メルバン卿に強い想いを寄せる若い女王の姿が強調されているのである。

実際、ヴィクトリア女王が非常に情が厚く、いったん人を好きになったら大変強い愛情を抱く人間であることは、彼女の日記からも明らかである。ヴィクトリアは生前にビアトリス王女を遺著管理者に任命し、自分の書き遺したもので、「家族に苦痛をもたらすような」箇所は破棄するようにと指示していた。母親の死後、ビアトリス王女は、70年にわたって書かれたヴィクトリアの日記122冊分をノートブックに、削除と修正を行いながら清書し、30年かけて111冊のノートを埋めた。彼女はたしかに母のいいつけを守ったわけだが、元の日記は、ヴィクトリアの孫であるジョージ五世が止めようとしたにもかかわらず、ほとんど燃やしてしまった。元の形で残っている日記は1840年2月、つまりアルバートと結婚した時までのものだけとなってしまったが、ヴィクトリアの若い頃の日記は、息子のエドワード7世の指示によって1912年に2代目エッシャー子爵により編集されて『ヴィクトリア女王の少女時代——1832年から1840年までの女王陛下の日記からの抜粋』というタイトルで出版された。その中には、少女時代のヴィクトリアが、遊びに来た親戚や友人が帰ってしまうことに過剰とも言えるほど反応する様子がうかがえる。例えば普段はそれほど親しくしていない親戚が何日か滞在して帰った後に「寂しくて仕方がない」と何日も書いているのである。

たまに会うだけであり、そう長く一緒にいたわけでもない親戚や友人に対するこの強い想い、彼らがいなくなったことをここまで寂しく思うこの感情は、同じ年頃の親しい友人のいない、ヴィクトリアの孤独な生活によるものでもあったのだろう。ヴィクトリアは子供の頃は人形が大好きで、132もの人形を持っていた。どの人形にも名前をつけ、綺麗な洋服を着せ、大変大事にしており、ヴィクトリアにとってそれが友達の代わりであることが窺われる。ITVの *Victoria* の Season One の冒頭でも、ヴィクトリアの沢山の人形への言及がある。

このように、最近の映画やドラマでは‘We are not amused’に象徴されるような、ユーモアのない、お堅くて無表情のヴィクトリア女王のイメー

ジは覆され、情熱的で、周りの人間に強い愛情を抱くだけでなく、その愛情が階級や人種の壁をも越えるという、現代の風潮に合ったヴィクトリア像が普及しつつある。ヴィクトリア朝の家具や装飾品、建築、美術といった、それまでは「醜悪」、「趣味が悪い」と片付けられていたものが再評価されているときに、ヴィクトリア女王の「再評価」が行われるのも不思議ではない。しかしいわゆる Victoriana (ヴィクトリア朝の物品) の再評価と違って、ヴィクトリア女王の場合は、そのイメージが書き換えられ、現代の感性に合うものとなっているのが興味深い。

歴史家のイヴォンヌ・M・ウォードはその著書 *Censoring Queen Victoria: How Two Gentlemen Edited a Queen and Created an Icon* の中で、ヴィクトリアの子供たちに任命されて女王の書簡集を編纂したエッシャー卿と A・C・ベンソンが、「読む人を不快にさせることもなく、スキャンダルを作ることもなく、しかしドラマティックな書簡集を編纂すること」を目標にして、一つの「ヴィクトリア像」を作り上げたことを考察している。ビアトリクス王女によって「修正」された日記についてはすでに言及したが、ヴィクトリア女王のイメージそのものが、現在は別のイメージにとって代わられつつある。‘We are not amused’ という言葉が何の意味を持たなくなる日も近いのかもしれない。

引用文献

The Notebooks of a Spinster Lady 1878-1903. London: Cassell, 1919.

Ward, Yvonne. *Censoring Queen Victoria: How Two Gentlemen Edited a Queen and Created an Icon*. London: Oneworld, 2014.

Wilson, A. N., ‘Queen Victoria: Who Do We Think She Is?’ *Sunday Times*, 28 August 2016

——東京大学教授